

視線恐怖傾向のある女子大学生にみられる対人関係の諸相

— TAT図版を用いた検討を通して —

齊 藤 和 貴

問題・目的

時代の変化にともない視線恐怖の増加が多く、論文によって指摘されている。それは、患者数の増加によっても示されており(丸山ら,1982;近藤1980)、また、一般の大学生を対象とした研究においても、1993年と2008年の比較では視線恐怖的な心性の顕著な増加が認められている。

視線恐怖は対人恐怖症の亜型であるが、対人恐怖症は「他人と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではない、他人に不快な感じを与えるのではない、嫌がられているのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型」(笠原,1993)と定義されており、不安や恐怖だけではなく不快な感じを与えているのではないかという意識やそのことへの確信の強さという点において関係念慮の存在が対人恐怖症に特徴的な点であるとされている。

対人恐怖症の中でも視線が主要な症状になることに関して鍋田(1997)は、自分の無力感などのネガティブな側面や自己主張の欲求や性的な願望・欲望のような本来備わっているものが見透かされる不安があると述べている。また、そこには見透かされることにより自己の評価を低迷させられる恐怖が存在しているという(福井,2007)。

視線恐怖症には対人恐怖症と大きく重なる面もあるものの、このように視線恐怖に特有な心理というものも認められている。しかし、視線恐怖に焦点を当てた研究があまりみられず、対人恐怖心性が高い者の中でも視線恐怖傾向の高い者と低い者の対人関係の側面や自己の側面などについての違いが不鮮明なままである。近年、視線恐怖の増加が指摘されており、視線恐怖に関する研究の必要性が感じられる。また、最近は女性例の増加が多く、論文で指摘されており、漠然とした対人緊張や不確実感を訴えるケースの増加(中村・北西・増茂・牛島,1995)も指摘されており、そこには自己像やライフスタイルの形成が曖昧であるため

である(鍋田,2004)と述べられている。そのため、現在の女子大学生を対象とすることで、対人恐怖心性の現代的な特徴や女性の対人恐怖心性について検討するとともに、視線恐怖傾向のある者の対人関係の側面と自己の側面を検討することを目的とする。また、対人恐怖症は親子関係の側面や攻撃性の側面からも説明されており、それらの側面についても検討を行う。なお、本研究においてはTAT(主題統覚検査)を用いた検討を行う。

方法

【調査1】

調査方法 質問紙法

調査協力者 女子大学生135名

調査期間 2013年7月

手続き 講義開始時に質問紙を配布し、研究の目的や質問紙調査を拒否することができることなどを紙面および口頭で伝え、同意を得たうえで回答してもらいその場で回収した。また、質問紙調査の協力者全員に対してTATの実施について概要を説明し、協力を依頼した。協力を承諾する協力者には、記名と連絡先を求めた。

質問紙 対人恐怖心性尺度(堀井・小川,1996;1997)を使用した。なお、本研究においては、「生きることに疲れている悩み」、「自分を統制できない悩み」因子の計10項目は除外して使用した。

【調査2】

調査方法 面接法(TATの実施)

調査協力者 女子大学生16名

調査期間 2013年8月～10月

場所 本学大学院心理臨床相談センター

手続き 質問紙調査時に調査協力への承諾を得られた17名の協力者のうち、連絡が取れた16名に対してTAT(Harvard版)を実施した。使用図版は呈示順に1・2・5・8BM・9GF・11・20・12BGの計8枚を使用した。記録は筆記および承諾を得てICレコーダーを使用した。

分析方法 ①関係相のカテゴリー(鈴木,2012)

これは、物語に表れた関係相(人物同士のかかわりの様相)をカテゴリーごとにチェックするものであり、6の大カテゴリーと20の小カテゴリーに分類されている。なお、スコアリングに関しては、研究者の他に心理学を学んでいる大学院生2名に協力してもらい、すべての図版において個別にスコアリングし、相違点に関しては検討のもと決定した。

②鈴木(1997)の分析方法と解釈仮説を参考にした分析 これは、カードごとに決められた分析方法に基づいて分析を行うもので、人間関係の側面、自己の側面、攻撃性・衝動性の側面、親子関係の側面について分析を行った。

結果

尺度の得点をもとに、正視恐怖群2名(人と目を合わせることにに対する苦痛の程度が強い)、視線恐怖群3名、対人恐怖高群3名、対人恐怖中群3名、対人恐怖低群5名の5群に分けて結果の比較を行った。なお、結果・考察においては正視恐怖群、視線恐怖群、対人恐怖高群を中心に行った。

①関係相のカテゴリーの結果 正視恐怖群においては他の群と比較して、人物同士のかかわりが多くみられたため、人との関係性への意識の強さが推測された。また、感情カテゴリーも多く対人関係における感情体験の豊かさも推測された。

正視恐怖群と視線恐怖群では“見(知)る―見(知)られる”という大カテゴリーの小計が高く、対人関係における“見る―見られる”ことへの意識の強さが推測された。視線恐怖群においては全体に占める割合も高く、“見る―見られる”という意識が対人関係の中心となっていることが推測された。

②鈴木(1997)の分析方法と解釈仮説を参考にした分析の結果 以下の4つの点について分析を行った。

対人関係の側面 正視恐怖群においては対人場面において主観的・感情的に反応する傾向が推測された。また視線恐怖群では主人公は他者を観察するようなかわりをしており、対人関係の希薄さが推測された。対人恐怖高群においては、正視恐怖群にみられるような感情的な側面や視線恐怖群でみられるような対人関係の希薄さは推測され

なかった。

自己の側面 正視恐怖群では強力性と無力性の存在と対人関係において自己が他者に縛られるという側面の強さが推測された。視線恐怖群では、自己主張の葛藤、自己の確立の問題が推測された。対人恐怖高群では自己の葛藤の主題は弱いものであった。

攻撃性・衝動性の側面 視線恐怖群と対人恐怖高群で健康な攻撃性を有しているというものが多かった。しかし、内部には激しい攻撃性が内在化されている者もみられた。正視恐怖群においてはそれぞれ攻撃性が否認・回避される傾向と激しい攻撃性の存在が推測された。

親子関係の側面 視線恐怖群と対人恐怖高群において、親から教育的関心を払われたという側面と愛情深い母親像が推測された。正視恐怖群の2名においては、愛情に恵まれなかったという意識を持つ者と、母親に迎合する傾向が見られた者がみられ、他の群とは異なる親子関係の体験をしていることが推測された。

考察

正視恐怖群、視線恐怖群、対人恐怖高群は、対人恐怖心性の高さという点において共通しているものの対人関係の様相に違いが見られた。

対人恐怖高群においては、親から心理的に自立出来ていない傾向や自己の葛藤が推測されない者がいた。この点において、明確な自己像が形成されておらず漠然とした不安感を感じていることが推測され、対人恐怖的心性の現代的な特徴であるとも考えられる。一方で、視線恐怖群では自己主張の葛藤や自己の確立の問題が推測されており、正視恐怖群においては強力性と無力性という対人恐怖症者に認められる自己の側面が推測されている。これらのことから、対人恐怖的心性の高い者の中でも、自己の葛藤が存在すると視線恐怖傾向に繋がると考えられる。また、より自己の存在への葛藤の強いものが正視恐怖傾向に繋がると考えられる。正視恐怖群では人との関係性への葛藤も強いことから対人関係における葛藤は非常に強いものになると思われる。ただ、視線恐怖傾向のある者にみられるこれらの葛藤は自己に真剣に向き合っているということでもあると思われ、自己の成長への欲求であるとも考えられる。